

夢を追う卒業生 その19 平成30年11月20日

特別なことはしない

◇今回は、野田菜桜子さん（群馬県立女子大学文学部国文学科）のレポートです！

この文章を、朝読んでいる人はおはようございます、昼の人はこんにちは、夜の人はこんばんは。群馬県立女子大学文学部国文学科 1 年の野田菜桜子です。この度は素敵な機会をいただいたので、私の学生生活についてお話してみようと思います。

まずは、私の通っている群馬県立女子大学についてお話します。群馬県立女子大学、略して県女ですが、ここは文学部と国際コミュニケーション学部からなる文系の大学です。わたしの所属している文学部国文学科では広く国文学について学ぶことができます。特に、上代の文学、いわゆる古文に力が入っています。

また、言語を専門に研究している教授もいるため、日本語教育もさかんに行われています。日本語教員になるためにこの大学に入る学生も少なくありません。



県女名物、円形広場の噴水

次に、佐羽淡斎研究会についてです。本学には、読書会というものがあります。読書会というのは、教授が講義やサークルには全く関係なく、独自に専門の分野の研究や調査、発表を学生と行うものです。今現在活動している読書会は2つ、そのひとつがわたしの所属している佐羽淡斎研究会です。佐羽淡斎は、江戸時代後期の漢詩人で、上野国のひとです。研究会では早稲田大学の読書会と連携して、佐羽淡斎の第2詩集『淡斎百律』の訳注をしています。研究会の最終的な目標は、100首すべてを訳して製本することです。また、これまでには淡斎の処女詩集『淡斎百絶』を訳注し、全訳註稿を発行しています。

研究会は、月に一度研究室に集まって作業をしますが、それに加えて夏休みは、県内の観光地みなかみ町に合宿に行き、漢詩漬けの2日間を過ごしたりもしました。

わたしは、大学に入学するにあたって、漢詩・漢文を深く勉強したいと考えていました。この研究会に参加することになったのは、偶然という感じでしたが、とても良い機会だったと今は思っています。



合宿のある日の晩ご飯



研究会のみなさんとわたし

最後に、わたしの第一志望は群馬県立女子大学ではありませんでした。センター試験が終わるまで、資料請求もしていませんでした。ここに来るなんて想像もしていませんでした。でも、半年をここで過ごして、やっと、この大学で過ごす楽しさを見出してきました。素敵な友人と出会うことができました。

受験期も大学に入ってから、自分の予定や理想通りには進まないことばかりです。でも、それを悲観したり気にしたりする必要はないと思います。大切なのは、どこに行くかではなく、どこで何をするかです。「ここでしかできないこと」って、実は無いのかもしれないと思います。「大学時代にしかできないこと」とか。それに、なにかやらなきゃいけないというものもないと思います。どこで何をするか、はたまたしないのか、全部あなたが選んでいいのです。

「頑張るのと無理をするのは違う」とは、我が敬愛する櫻井昌子先生のお言葉ですが、強歩大会のときだけでなく、いつでも忘れないでいてほしい言葉です。苦しい思いも、悲しい思いもするかもしれないけれど、あなたの納得できる未来が訪れることを願っています。